

福島県文化財調査報告書第87集

田島町寺前遺跡発掘調査概報

1980年3月

福島県教育委員会

田島町寺前遺跡発掘調査概報

1980年3月

福島県教育委員会

序 文

寺前遺跡は、南会津郡田島町に所在する縄文時代・弥生時代の遺跡であり、その一部は昭和51年度に田島町によって発掘調査がなされております。

昭和54年度には、この寺前遺跡の未発掘地域の南端部に教職員アパートが建設されることになりましたので、関係機関と協議した結果、文化財保護の立場から、削平されるアパート本体部とフェンス部分を発掘調査し、記録を後世に残すこととなりました。

調査の結果、縄文時代・弥生時代の遺構・遺物が検出され、学術的に貴重な資料を得ることができましたのでその報告書をここに刊行いたします。

報告書の刊行にあたり、全面的なご協力をいただいた福島県文化センター遺跡調査課をはじめ、小雪の舞い散る中、発掘調査にご協力いただいた南会津教育事務所、田島町教育委員会、直接発掘に参加していただいた地元の方々に厚く感謝申し上げ、本書が広く活用されますことを祈念いたします。

昭和55年3月31日

福島県教育委員会

教育長 辺 見 栄之助

目 次

序 文

福島県教育委員会教育長 辺見栄之助

寺前遺跡調査要項・例言

I	寺前遺跡の位置と地形	1
II	発掘調査の経過	2
III	検出された遺構	5
IV	検出された遺物	8
V	ま と め	17

図 版 目 次

図版一	遺跡	遺跡の遠景	19
		遺跡の近景	19
図版二	遺構	調査風景	20
		調査区内土層断面	20
		調査区全景	20
図版三	遺構	Pit 14周辺の土坑群	21
		Pit 12石棒状安山岩	
		出土状況	21
図版四	遺構	A 1 グリッド縄文土器	
		出土状況	22
		Pit 16内弥生式土器	
		出土状況	22
図版五	遺構	各土坑全景	23
図版六	遺構	各トレンチ全景	24
図版七	遺物	縄文土器	25
図版八	遺物	縄文土器	26
図版九	遺物	弥生式土器	27
図版十	遺物	土偶・石器・石製品	28

挿 図 目 次

図 1	寺前遺跡と周辺の遺跡	1
図 2	寺前遺跡地形図	3
図 3	寺前遺跡調査区全体図	4
図 4	土坑実測図 I	6
図 5	土坑実測図 II	7
図 6	第 I 群・第 II 群土器拓影	9
図 7	第 II 群土器拓影	10
図 8	第 III 群・第 IV 群土器拓影	11
図 9	第 V 群土器拓影	13
図 10	土偶実測図	14
図 11	石器実測図	14
図 12	石製品実測図 I	15
図 13	石製品実測図 II	16

寺前遺跡発掘調査要項

1. 遺跡の位置 南会津郡田島町寺前
2. 調査の目的 教職員アパート建設に伴う発掘調査
3. 調査期間 昭和54年4月9日～4月19日
4. 調査担当者 玉川 一郎（福島県文化センター遺跡調査課）
5. 調査員 橋本 博幸（*）
6. 協力機関 南会津教育事務所・田島町教育委員会・田島町公民館

例 言

1. 本報告書は、昭和54年4月に、教職員アパート建設工事に伴う事前調査として、福島県教育委員会が実施した田島町寺前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書には昭和53年3月に、福島県教育委員会が実施した試掘調査の資料を同時に採録した。
3. 本遺跡の発掘調査は、教育庁文化課から派遣申請をうけて、福島県文化センター遺跡調査課の玉川一郎と橋本博幸が調査員として調査を行った。
4. 本書の執筆は以下の分担で行った。
I・II・IV・V……………玉川一郎
III……………橋本博幸
5. 本書の編集は玉川一郎が行った。
6. 本調査で得られた資料の水洗い・ネーミング・接合作業は福島県教育委員会文化課分室で行い、実測・トレースなどの作業は福島県文化センター遺跡調査課で実施した。
7. 実測・トレース・割付け作業には2名の調査員の他に、遺跡調査課の篠崎綾子・橋本昌子・長沢真知子・福地真由美の参加があった。記して感謝申し上げる。
8. 報告にあたり、弥生式土器に関しては県文化センター目黒吉明氏、阿玉台系土器の分類に関しては芳賀英一氏から有意義な御教示をいただいた他、文化センター遺跡調査課職員各氏より暖かい励ましがあった。感謝申し上げる。
9. 本書における引用・参考文献は、紙数の関係で省略せざるを得なかった。
10. 本文中の遺物実測図・拓影には、出土地点・層位を明らかにするため、地点一層位を記号で明示したが、記載例は次の通りである。
試1-Ⅱ（試掘調査第1トレンチⅡ層） A-Ⅱ（本調査AトレンチⅡ層）
B2-Ⅱ（本調査B2グリッドⅡ層） 表 採（遺跡内表面採集）

I 寺前遺跡の位置と地形

寺前遺跡は、福島県南会津郡田島町字寺前に所在する縄文時代および弥生時代の遺跡である。会津盆地南部の奥羽山脈の山間部に所在する田島盆地は、大川やその支流に沿ってひらけた小規模な盆地であるが、盆地床には河岸段丘や扇状地などの発達がみられる。寺前遺跡はこれら段丘の中でも、大川の南岸の盆地床末端部に位置しており、遺跡の南端は奥羽山脈の急崖を呈する山裾に接している。盆地内には山側からこれらの段丘面上に形成された扇状地が、小規模ながら複雑に発達しているが、寺前遺跡周辺も北側に緩い傾斜を有しながら扇状に広がる景観があり、遺跡の西を流れる大門川や徳昌寺付近を北流する小河川はいずれも伏流しており、この付近一帯が段丘面上に形成された扇状地の扇央部にあたるものと思われる。

田島町には遺跡台帳に登録された遺跡が16遺跡あるが、その多くは大川によって形成された段丘面上に立地していて、縄文時代の遺跡が多い。寺前遺跡周辺では会下・油灯・永田・大明神A遺跡などが縄文前・中期の遺跡であり、折橋・油灯遺跡では弥生中期の土器が出土している。過去に調査された遺跡は折橋遺跡の他、大川の上流にあたり押型土器を出土した石橋遺跡がある。

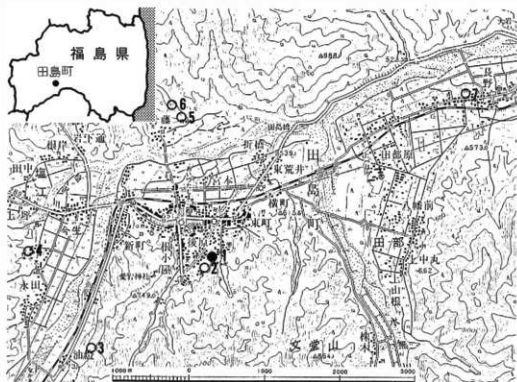


図1 寺前遺跡と周辺の遺跡

〔五万分の一「田島」使用〕

- 1 寺前遺跡 2 会下遺跡 3 油灯遺跡 4 永田遺跡
5 大明神B遺跡 6 大明神A遺跡 7 折橋遺跡

II 発掘調査の経過

寺前遺跡は、福島県遺跡地名表および埋蔵文化財包蔵地調査カードでは、田島町寺前2985番地を中心とした縄文時代および弥生時代の遺跡とされている。遺跡が田島町市街地に接した地点にあるため、近年は宅地の造成が盛んで、昭和51年には町道拡幅工事が実施されるにあたり、町史編纂の一貫として法政大学伊藤玄三氏によって、寺前3183・3142番地付近約300㎡の発掘調査が行われた。この調査では縄文時代中期の住居跡3軒の他、溝跡などが検出され、遺物も縄文中期の土器や弥生式土器が多数出土している。また地元の研究者樋口弘一氏は、こうした破壊の合間をぬって、遺跡の表面採集を積極的に行っており、採集した弥生式土器の一部が資料として報じられている。

ところで昭和54年3月初め、寺前3165番地を中心とした場所に、教職員アパートを建設する計画が県教育庁文化課に通知された。文化課では予定地が寺前遺跡の一部に該当する可能性があるため、昭和54年3月14日～16日の3日間、予定地内に4本のトレンチを入れ試掘調査を行った。その結果、予定地の西寄りの地点に縄文・弥生時代の遺構および遺物包含層が存在することが確認された。

この成果をもとに、文化課は関係機関と協議した結果、削平をうけるアパート本体部分と境界部のフェンス設置部分については発掘調査を実施して、記録保存をすることとなった。同時にアパート本体部とフェンス以外の部分は盛土して削平をしない方法で保存するよう対策を講じた。

調査の方法 本調査は、昭和54年4月9日より4月19日まで、延9日間実施した。前月の試掘調査で遺構・遺物の検出された第1・第2トレンチが一部埋め戻しされてはいたものの、両トレンチがアパート本体部の北・西の端にほぼ該当しているため、このトレンチを含めた本体部建設予定地域、東西20m×南北7.5mに、南・西・北側に各々1mのゆとりを持たせ、3m×3mのグリッドを設定した。各グリッドは東西方向を西からA～F、南北方向は北から1～5の記号を付し、両者の組み合わせで個々のグリッドを呼称することとした。設定したグリッドは千鳥に表土剥離を行ったが、この段階で表土下に遺物を含む黒色土（Ⅱ層）が調査区のほぼ全域に分布することが判明したため、調査区中央部に東西・南北に直交するグリッド壁面を土層観察用畦として残し全面的表土を剥離し、遺物包含状況・遺構の検出に努めた。

その結果、Ⅱ層では調査区北西部に縄文中期土器と弥生中期土器が混在していて、全調査区ではこの部分が最も密に遺物が出土することが判明した。そこでⅡ層中にいくつかの生活面の存在することを予想し、遺構の検出面を確認しながら精査に着手したが、Ⅱ層自体は10cm程度の厚さしかなく、これを分層することはできなかった。遺構も最終的にはⅡ層を完全に精査した後、Ⅲ層暗茶褐色土上面で検出している。検出遺構の大半はピットであり、これらは2分法で断ち割り

調査を実施した。またフェンス部分には幅1.5m、長さ55mについてA～Dトレンチを設定し、同様の方法で調査を実施した。

調査の経過 調査は次のような日程で実施した。

- 4月9日(月) 県文化課菅原文也専門文化財主査と玉川・橋本両調査員、田島町教委・南会教育事務所で調査打合せ後、現地に。グリッド設定作業を行う。
- 4月10日(火)～12日(木) 粗掘り作業。Ⅱ層黒色土に遺物が含まれることを確認する。
- 4月13日(金)～17日(火) Ⅱ層の精査とピットの確認・精査を行う。
- 4月17日(火) A～Dトレンチ設定。粗掘り・精査を行う。
- 4月18日(水) ピット群・各トレンチの平面実測・レベルワーク・写真撮影を行う。
- 4月19日(木) 補足調査後器材の撤収を行い、午後調査員帰福。



図2 寺前遺跡地形図

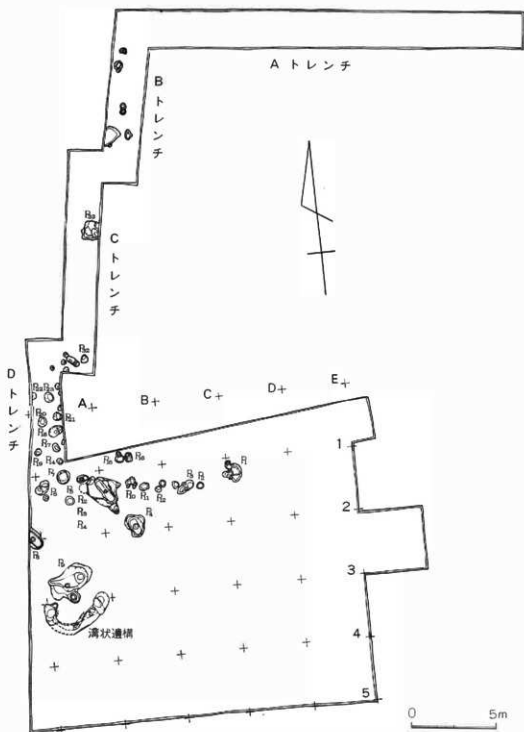


図3 寺前遺跡調査区全体図

Ⅲ 検出された遺構

寺前遺跡の調査で検出された遺構は大小あわせて約40基のピットと、弧状にめぐる溝状遺構1基である。ピットは大型のものでは底面に小ピットを付設していて陥し穴状土坑とされるものが3基ある他、時期の明確なものは弥生式土器片を埋土中に含んだ小ピット6基と、石臼破片を含んだ中世以降と考えられる小ピット1基だけであり、その多くは伴出土器もなく時期・性格が不明である。

陥し穴状土坑 3基検出された。Pit 4・Pit 8・Pit 14がこれに該当する。いずれもⅡ層の下で確認され、地山を掘り込んでいる。Pit 8は調査区外に遺構が続いていて、約 $\frac{1}{2}$ を発掘しており、全形が不明である。

Pit 4は長径1.1m、短径0.7mの不整な長円形の平面プランを呈し、底面は長径0.9m、短径0.35mの隅丸長方形である。確認面からの深さは1.0mあり、底面の中央部に直径22cm、深さ30cmの円筒形のピットを有している。壁面は一部オーバーハングする部分があるが、外傾気味に直立している。埋土は黒褐色土を主体としているが、上半部では角礫の混入が見られた。出土遺物はない。長軸は約N26°W前後と思われる。

Pit 8は全体の $\frac{1}{2}$ 程度を調査したが、長径1m、短径70cm程度の楕円形を呈す土坑であるものと推定される。検出面からの深さ90cm、底面に直径20cm、深さ30cmの円筒状ピットが1個確認された。黒褐色土が埋まっており、出土遺物はない。

Pit 14は長径1.42m、短径40cm前後の長方形を呈したと思われるが、Pit 12・13と重複し、上部を破壊されているため正確ではない。しかし底面は長径1.25m、短径30cm前後の長方形状を呈している。検出面からの深さは最大95cmあり、底面中央には直径18cm、深さ27cmの小ピットが見られる。埋土内からの出土遺物はない。

溝状遺構 Ⅱ層下部で検出された遺構である。弧状を呈し、両端部の距離は約2mある。幅は60cm前後であるが、底面は小ピットが連続したように凹凸がある。壁面は中心部側にオーバーハングする部分が多く、外方から斜めに掘り込まれたような状態を呈している。遺構内には角礫をわずかに含んだ黒褐色土が見られた。埋土中に3片の縄文土器片が含まれていたが、胎土などから阿玉式土器に同定されるものであり、縄文中期の遺構である可能性が高い。

弥生時代の遺構 埋土中に弥生式土器片を含んでいて、弥生時代の遺構と推定されるのは、Pit 2・Pit 8・Pit 15・Pit 16・Pit 19・Pit 24である。これらの遺構は平面円形ないし不整形を呈すものであり、直径もPit 2が30cm、Pit 8が50cm、Pit 15が50cm、Pit 16が42cm、Pit 19が26cm、Pit 24が35cmと小規模で、深さもPit 15が検出面より15cmと最も浅く、最大ではPit 2・Pit 19の30cmである。遺構内堆積土はいずれも黒色土の単層を呈していた。

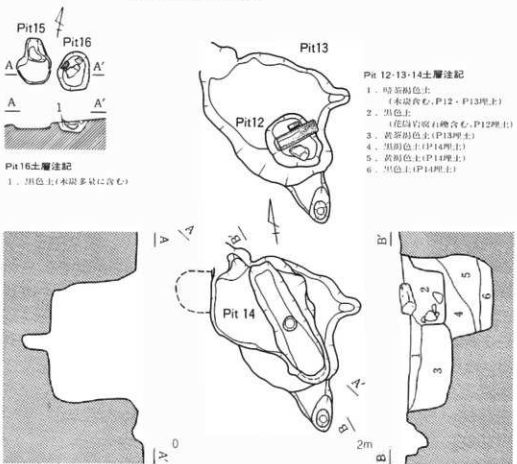
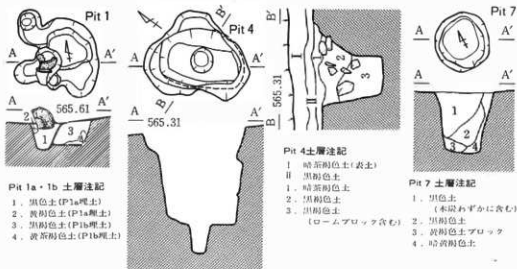


図4 土坑実測図1

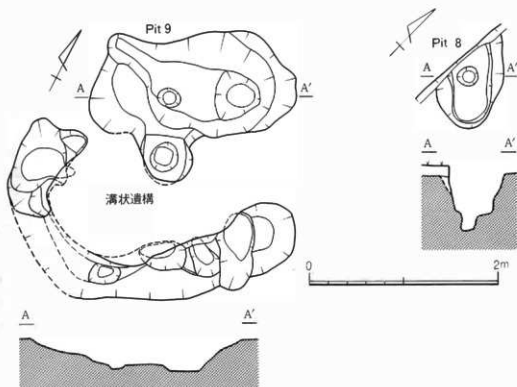


図5 土坑実測図Ⅱ

遺物がまとまって出土したのはPit 16とPit 19である。Pit 16では木炭を多量に含む黒色土が充填しており、この中に底面より約5cm程浮いた状態で、図9-1に示した壺形土器の頸部から体部上半にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残った破片が出土したが、上端は検出面にあり、耕作時に上部を削りとられた可能性が強い。Pit 19では図9-22の底部付近の破片が出土したが、これも底面からは浮いた状態で埋土中に混在していた。

中世以降の土坑 中世以降の土坑と考えられるのはPit 1である。Pit 1も4基程度の小土坑と切り合い関係にあるが、そのうちでは最も新しい土坑であり、直径30cm、深き25cmの不整円形を呈したものと思われる。土壌間に空隙のある黒色土中に砂岩製石臼破片が混在していた。石臼の下端は底面より約20cm浮いていた。

その他の土坑 以上の土坑の他に小規模なものが約30基ある。この中で埋土中に縄文土器片を含んでいたのはPit 4・Pit 7・Pit 12・Pit 13・Pit 33・Pit 34であり、これらは縄文時代の土坑である可能性が強い。Pit 12・Pit 13は、Pit 14を壊した遺構であり、Pit 13はPit 12に壊されている。包含された土器は阿玉台式土器を主体としており、この時期の土坑とすればPit 14はそれ以前の陥し穴状遺構と考えられる。なおPit 13底面からは石鏃・スクレーパーが出土した。

A 2グリッド周辺では縄文土器および河原石などがⅢ層上面に密着して出土しており、この面に縄文中期の生活面のあった可能性があるが明確にできなかった。

IV 検出された遺物

出土資料の内訳は、縄文土器約350片、弥生式土器約60片の土器類と石器・石製品である。この他に試掘調査の際に得られた土器類・石製品・土偶がある。本項ではこれらの遺物を一括して資料報告とする。

土 器

土器は縄文土器と弥生式土器である。これらは文様上の特徴から次の5群に分類される。

第Ⅰ群土器 織維土器群を一括した。口縁部破片2点と体部破片9片がある。本調査で得られた資料はA2・A5グリッドのⅡ層下面で出土している。図6-1は緩い波状口縁を呈すもので、口縁下1.5cmの部分に隆帯が走り、さらに口唇部まで直行する隆帯で区切られる。横の隆帯より上部の口縁部は無文地に半裁した工具で斜めに引いた沈線が付加され、隆帯以下の体部はRL縄文である。内面口縁部に条痕がある。図6-2は口縁が肥厚し外反する土器で、口縁部にはRL縄文を押圧した蕨手状の文様がある。内面は口唇上面から体部にかけて粗い条痕がある。体部破片はいずれも縄文を有しておりRL4片、LR2片が判別できる。花積下層式土器である。

第Ⅱ群土器 縄文中期初頭の阿玉台系土器を一括した。総破片約200片あり、寺前遺跡の縄文中期土器の約65%を占める。次の4類に細分される。

第1類(図6-3~20) 五領ケ台式土器よりは新しい要素があり、いわゆる阿玉台式土器よりは古い様相をもつ土器を本類とした。交互刺突文をもつ土器(3~8)や細い角押文をもつもの(10~12)、細く低い隆帯が貼布され、Y字状の懸垂文を有すもの(13・15・16)などがある。4・7のように頸部でくびれた深鉢形土器が多いものと思われるが、口縁は3・11のように山形の把手を有す。9・10は口唇部にスリットが刻まれ、古い要素が指摘されよう。17も縄文地文部を三角形に彫刻しており、これも阿玉台式土器以前の手法と考えられる。19・20は折り返し口縁で直行するものであり、下小野式などに近い土器であろう。胎土に雲母を含むものが少い。

第2類(図7-1~17) 阿玉台Ⅰb式と称される土器に近いものを本類とした。隆線に沿って1条の角押文を施すのが特徴であり、細く深く角押しされるために沈線状を呈す。口縁で内弯して緩いキャリバー状を呈す深鉢が多いが、2は浅鉢形土器であり、口縁内面に角押しによる渦巻き文が施されている。4・15は櫛状把手の一部である。地文は無文地に装飾を施すが、体部文様は9・11・12・15・17のように爪形文で飾られるものが多い。ほとんどの破片に多量の雲母混入を認める。

第3類(図7-18~25) 阿玉台Ⅱ式に含まれる土器を本類とした。幅の広い断面カマボコ状の隆線に沿って複列の角押文を施した特徴がある。18は口縁部に窓枠状の隆帯があるが、片側に押しつぶされたような隆帯である。21は隆帯上に刻目が施され、25は指頭による押圧痕が残る。

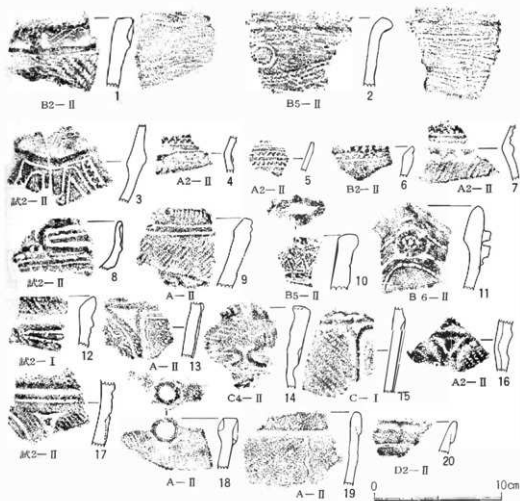


図6 第1群・第II群土器拓影

体部文様は24・25のように爪形文によって加飾されるものが多いと思われるが、第2類に比べ施文角度が器面に対して直角に近く、間隔も密である。第2類同様に雲母を多量に含んでいる。

第4類(図7-26-28) 阿玉台Ⅲ式に比定される土器である。幅が広く、低い隆帯に沿って、これも幅広の角押文・爪形文が付加される特徴がある。26は窓枠状の隆帯による区画を有す口縁部破片であり、28はこの隆帯が橋状把手状になっている。27・28では爪形文の内側に波状の沈線が付加される。第2類・3類に比べ雲母の混入は少ない。本類に含まれる土器は10片前後と数量的にも少ない。

第Ⅲ群土器(図8-1-14) 大木系土器を本群とした。約80片の破片があり、中期前葉の土器の25%にあたる。縄文地に隆線や沈線で文様を表出しているが、R L縄文が多い。1・2のように絞結文が地文となるもの他、3のように結束のない羽状縄文、7のような撫糸文もあるが微量

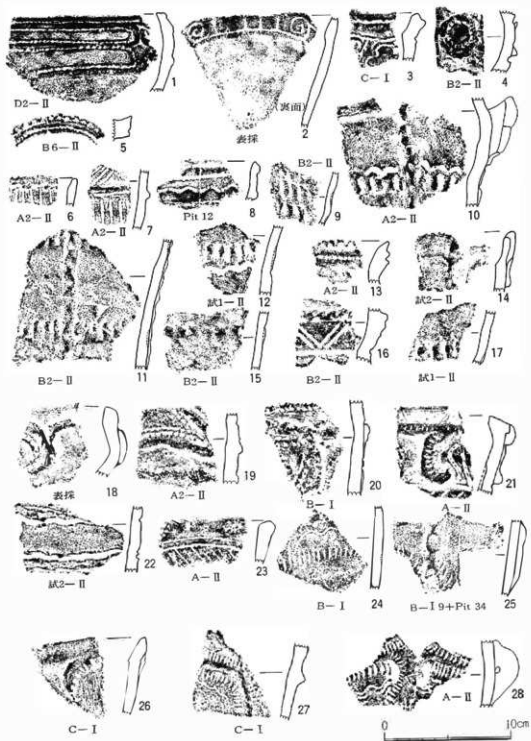


图7 第二群土器拓影

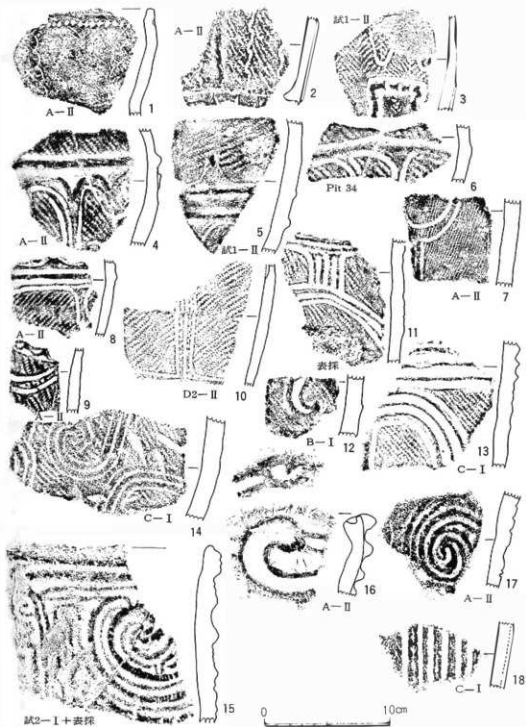


图8 第三群·第四群土器拓影

である。4は隆線による連続V字状文を貼布し、沈線と組みあつたY字状文を構成するが、6は沈線だけでY字状文を表出している。14は隆線による渦巻文である。12は縄文地に隆線によるS字状文を貼布しているが、第Ⅳ群土器16と関連する文様である。

第Ⅴ群土器(図8-15~18) 馬高系土器を一括した。立体的な隆線による渦巻文・S字文などを主モチーフとする土器である。体部は18のように縦方向の隆線によって充填される。本類土器は約30片あり、全体の10%にあたる。

第Ⅳ群土器 弥生式土器を一括した。文様表出技法から5類に分類される。総破片58片ある。

第1類(図9-1~5) 1本の沈線で文様を表出したものである。1は壺形土器であるが、頸部に2段の平行線と、これまた2段の釣状沈線文を配し、体部には間隔6mm~10mmの渦文を描いている。2・3は同様な渦文の体部破片であり、胎土・焼成は1に酷似している。7片ある。

第2類(図9-6~16) 2本1組の平行工具を用いて渦文・三角形文・連弧文などを描いた土器である。壺形土器・深鉢形土器などがある。平行工具の幅は4~6mmである。14は壺形土器頸部破片で平行線間に粘土層が付加される。13・16は体部に直前段多条縄文を地文としたもので、15は口唇部に縄文が施される。7は第1類1とPit16で共伴した。13片の破片がある。

第3類(図9-17) 幅1mm前後の3本1組の平行工具を用いたものである。17に示した1点の破片が得られている。

第4類(図9-18~22) 3本の櫛歯状工具で波状文や押しきした平行線文を描いた土器である。壺形土器・深鉢形土器などの器形が知られるが、一様に粒の細い胎土を用い、乳白色に焼成される特徴がある。18・19は口唇部にスリットが付加される。22は胎土・焼成などから本類に伴う土器と考えられる。5片出土した。

第5類(図9-23~30) 地文だけの体部破片を一括した。いずれも縄文を施しており、23・25はR L、24はR rの燃り戻し、26はR L多条、27~30はL R多条縄文である。単節2本燃りの原体よりも直前段多条縄文を用いる割合が高い。

土製品

試掘調査時に第1トレンチⅡ層下面から出土した土偶が1点ある。本調査でのB2グリッドにあたる。

土偶(図10) 肩部で「く」の字に屈曲する板状の土偶である。頸部より上半と、腹部下半を欠損している。腹面・背面・側面に、沈線を主とした渦巻文・Y字状文が付加されている。腹面の肩部から内側には隆帯が形成され、上部に刺突文を有す。刺突文は腹面の頸部から垂下する沈線によって囲まれた内部にも施されている。残存高9.3cm、肩部での最大幅12.6cm、厚さ3.5cmを測る。胎土に砂粒を多量に含んでおり、器表面はザラザラしている。土偶としては大型の部類に入るものである。

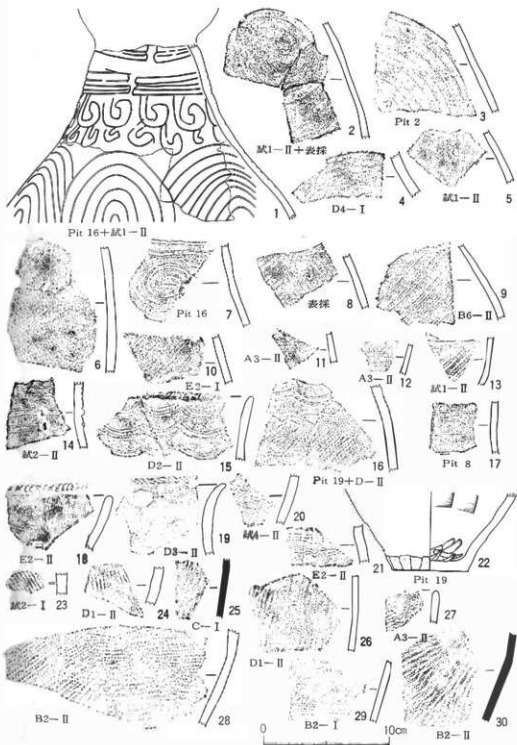


图9 第V群土器拓影

石 器

本調査で得られた4点の石器がある。

石鎌(図11-1) Pit 13から出土した水晶製の石鎌である。基部の片側を欠損している。深い挟りのある無茎石鎌の仲間であろう。全長3.7cm、最大幅1.4cm、厚さ0.4cmある。

石匙(図11-2) 縦形石匙である。ブレード状剥片の先端側につまみを作り、基部側に主軸に直交した刃部を形成している。側端は片側にだけリタッチがある。全長6.0cm、幅2.0cm。つまみ部分にアスファルトの付着が観察できる。

スクレーパー(図11-3) Pit 13から出土した。剥片の両側端と先端にリタッチを加え、刃部を形成している。先端側の刃部は平坦であるが、使用時にできた剝離部がある。全長7.9cm、幅5.1cm、厚さ1.4cmある。玉髄製。

ドリル(図11-4) 頁岩製のドリルである。自然面を残す剥片の先端を刃部としている。全長7.2cm、刃部断面は三角形である。

剥片 B3グリッドII層を中心として剥片が約50片程出土している。黒燧石・水晶・頁岩などがあるが、黒燧石が約7割を占める。

石 製 品

凹石・磨石・石臼が出土している。

凹石(図12-2～6・図13-1・3～5) いずれも安山岩製で両面に1ないし2個所の凹部が見られる。

磨石(図11-1・図12-2) 両者安山岩製。図12-2は側面に磨滅した平坦面が見られる。2は両面に凹部があり、凹石としても分類できる。

石臼 Pit 1内から出土した砂岩製石臼残片がある。時間の関係で図示できなかった。

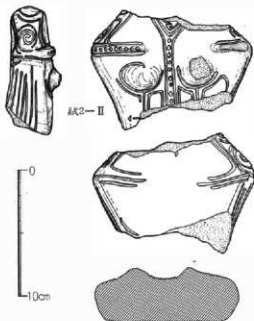


図10 土偶実測図

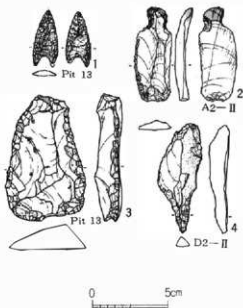


図11 石器実測図

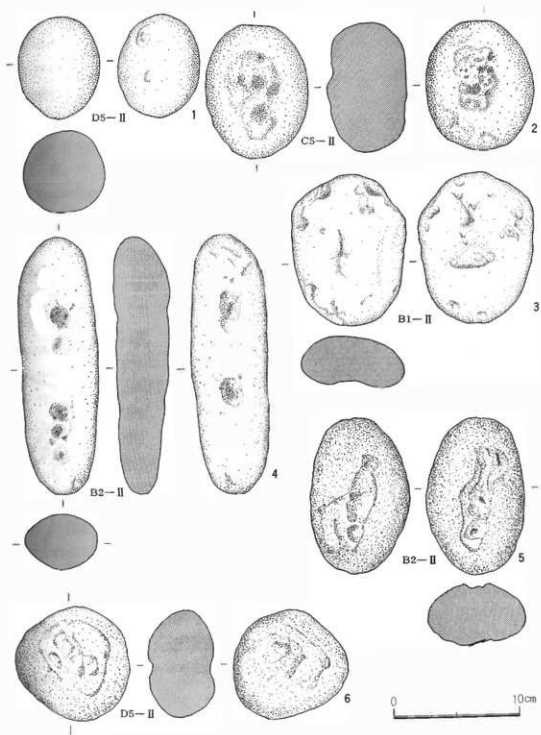


图12 石製品実測图 I

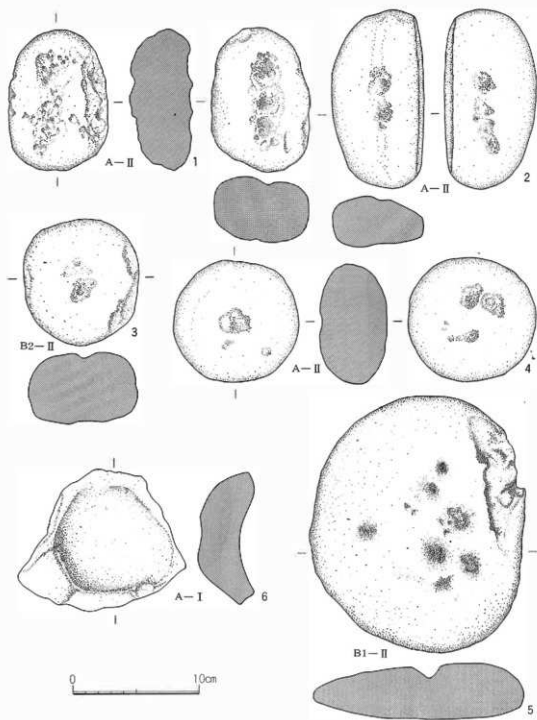


图13 石制品实测图 II

V ま と め

寺前遺跡の調査の成果は以上のような内容のものであった。得られた資料は最大限提示したが、それでも全部ではない。提示した遺構・遺物に関しても十分な検討ができていないが、最後にこれらに関する若干の考察を行い、まとめとしておく。

遺構について 寺前遺跡の今回の調査で確認された遺構は、陥し穴状遺構・溝状遺構・小ピットであり、ある時期の直接の生活面は検出できなかった。このうち時期のある程度判明するのは弥生式土器を含んだ小ピットと、石臼を検出した小ピットである。これらは伴出土器からそれぞれ弥生時代中期後半・中世以降に機能した遺構と判断できる。弥生時代では Pit 16 のように壺形土器の大型破片を含んでおり、特殊なピットと思われるが、ピットの規模などから見て再葬墓のようなものではあるまい。日常生活に関連した遺構であると考えておきたい。恐らくは弥生時代の生活面が存在したのであろうが、後世の擾乱によって消滅したものであろう。

縄文時代に比定される遺構は、Pit 12・13 などの縄文中期初頭の土器片や石器を含んだピットであるが、これらの性格についても明確に語るの根拠が見い出せなかった。この時期には昭和51年の調査で判明しているように、今回調査した地点より北へ約 100 m 付近には竪穴住居跡が作られ、中期初頭の集落が展開されていた。しかしながら今回は、フェンス部に入れたトレンチ内にも、住居跡のような日常生活の舞台となった遺構が検出できなかった。地形的に見ても、今回調査した地点は、寺前遺跡の縄文中期初頭の集落遺跡としては外縁部、遺跡の末端部にあたると評価しておきたい。ただし、この地点にも遺物の包含は認められるのであり、日常の生活範囲の中で見れば、歴史的な意義は高いものである。集落全体域の関連で、今後より追求せねばならない課題であろう。

陥し穴状遺構に関しては、時期を判断する材料がほとんどない。辛じてその根拠を求めれば、縄文中期初頭の遺構と思われる Pit 12・13 に切られた Pit 14 が陥し穴状遺構であり、重複の理論からは Pit 14 が中期初頭より古く位置づけられる点であろうか。これら 3 基の陥し穴状遺構は構造の面で共通性があり、その点では同一時期に構築された可能性が大であるが、調査で得た資料で中期初頭以前の遺物は、前期初頭に比定される花積下層式土器片であり、この時期までさかのぼる可能性も否定できない。県内でも近年、この種遺構の調査例が、郡山市柿内戸遺跡・東村西原遺跡で増えている。いずれも時期・性格が不明であるが、横浜市霧ヶ丘遺跡で考えられたように、動物を捕獲する陥し穴と考えておきたい。長軸が大門川の谷地部に向った共通性のあることを補足しておく。

遺物について 調査で得られた遺物は前述した如く、縄文前・中期土器、弥生中期後半の土器、土偶・石器・石製品などであった。土偶・石器・石製品は縄文土器を含むⅡ層や、Pit 13 から出

土したものであり、縄文時代の遺物と考えるのが妥当であろう。これらの様相は、一般的な縄文遺跡のそれと比較して、顕著な相違点が指摘できない。土偶はその特徴から中期初頭に位置づけられるものと考えられる。

縄文土器は型式上の特徴から4群に分類された。第Ⅰ群は織維土器であり、文様の特徴は花積下層式土器に比定される。ただし内面の粗い条痕や隆漣など、花積下層式でも比較的古い部分に含まれる土器と考えている。

第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器は型的にも共通要素を多分に併せもった土器であり、他遺跡での例などから見ても、遺跡内で共存した可能性が高いものであるが、出土状況からはこれを明確にできなかった。いずれにしても中期初頭に位置づけられる、寺前遺跡の主体となる土器であり、昭和51年の調査で検出された住居跡もこの時期の土器を伴っており、集落の中心となる時期の資料と考えられる。

第Ⅱ群土器は阿玉台系土器群であり、量的には1・2・3類とした、五領ケ台式以降、阿玉台Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ式に比定されるものが約9割を占める。またこの仲間の土器は、第Ⅲ・Ⅳ群とした大木系土器や馬高系土器に比べ約7割前後の比率で出土しており、本遺跡における阿玉台系土器の優位性を認めなければならない。霞ヶ浦周辺に分布の中心を置く阿玉台式土器は、本県でもほぼ全域に分布することが知られているが、本遺跡のようにこれが主体となるような遺跡は、県内では九慈川流域や田島盆地を中心とした南会津郡である。阿玉台式がほぼそのままの形で受容される背景には、那珂川を介した栃木県を経由した文化交流のルートを考えねばなるまい。いわば伴出したと言っても過言でない第Ⅲ群の大木系土器は、大木7b式に含まれるものが多く、大木8a式でも古手の土器までであり、阿玉台1b・2・3式を主とした土器群が、大木7b式に併行した可能性が再確認された。第Ⅴ群の馬高系の土器は今調査では少量出土しただけであった。馬高式土器出現の背景を考える上で今後の資料となろう。

第Ⅴ群土器は弥生式土器であった。第1類・2類土器はその文様上の特徴から、会津地方に広く分布する川原町口式に比定される。川原町口式には施文の技術的な点で、型式内容を再吟味する動きがあるが、いわゆる1本沈線・2本沈線の共伴は、Pit16で明瞭に確認されている。1類・2類の比は1：2と、本遺跡では2本同時施文によるものがやや多いことを指摘しておく。

第4類土器は櫛歯状工具によって平行線による波状文や押し引き沈線を主要モチーフとするもので、胎土などでも1・2類土器などと明確な違いがある。現在のところ群馬県前原遺跡出土の櫛歯状土器との類似点を考えているが、県内では従来出土例の少なかった土器であり、今後の編年的研究の重要な資料となろう。いずれにしても第Ⅴ群土器は県内における弥生時代中期後半に位置づけられる資料であろう。

Pit1に示された中世以降の本遺跡の様相は皆目不明である。

圖 版



遺跡の遠景（西から望む）



遺跡の近景（北西から望む）



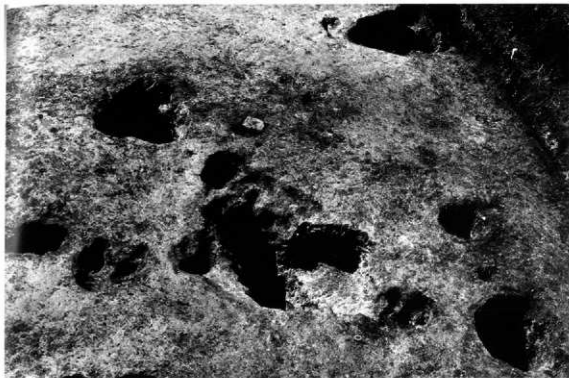
調査風景



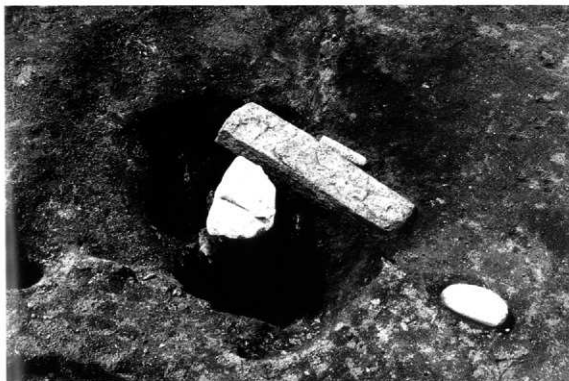
調査区内土層断面



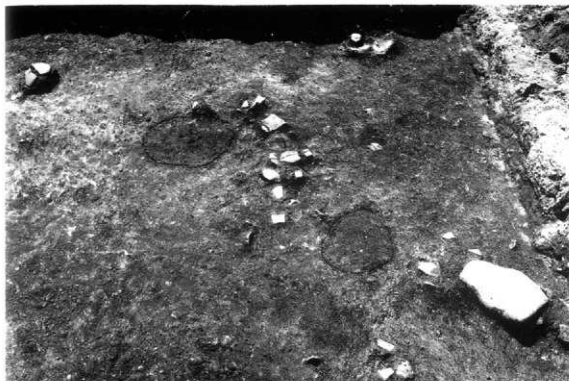
調査区全景（西から撮影）



Pit 14 周辺の土坑群



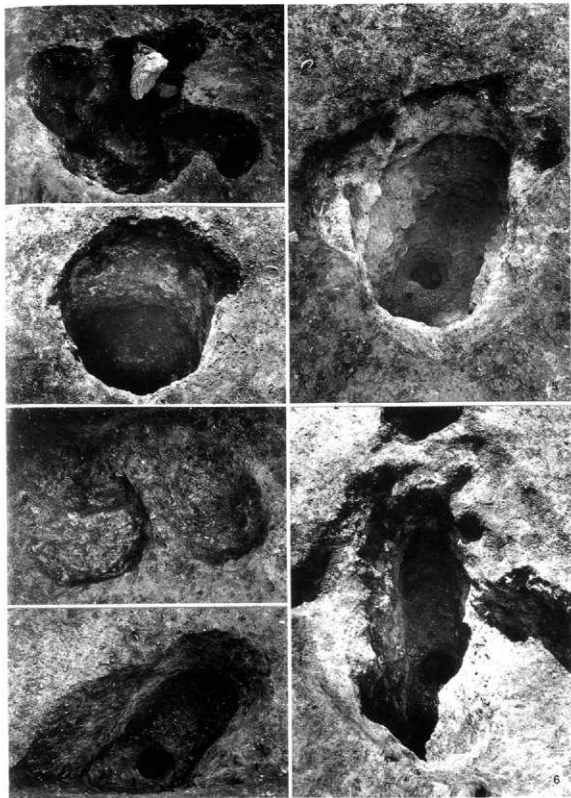
Pit 12 石棒状安山岩出土状況



A1 グリッド縄文土器出土状況



Pit 16 内弥生式土器出土状況



各土坑全景

1··Pit 1 2··Pit 7 3··Pit 15·16
4··Pit 8 5··Pit 4 6··Pit 14



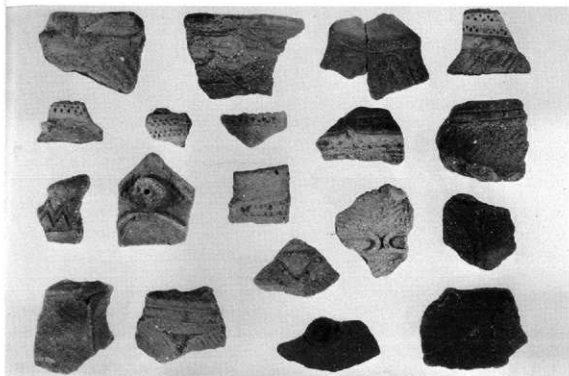
各トレンチ全景

1…Aトレンチ

2…Bトレンチ

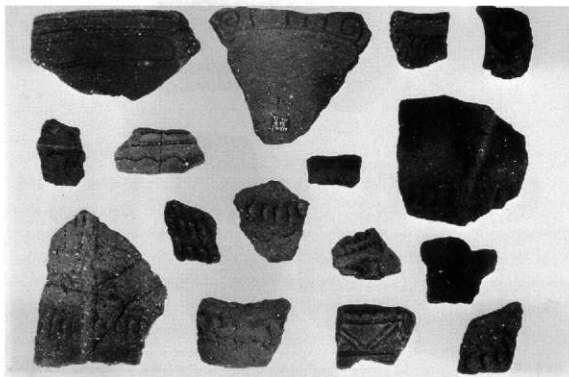
3…Cトレンチ

4…Dトレンチ



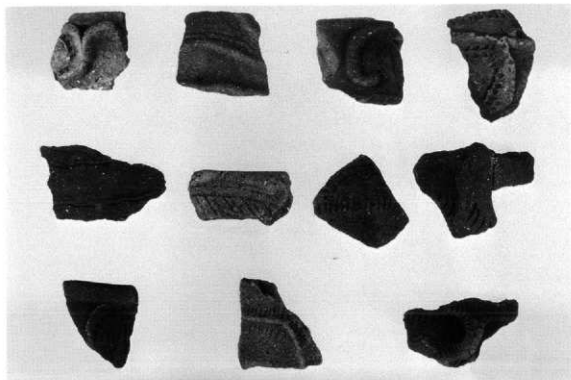
縄文土器 (第I群・第II群1類土器)

上段左2つ第I群土器



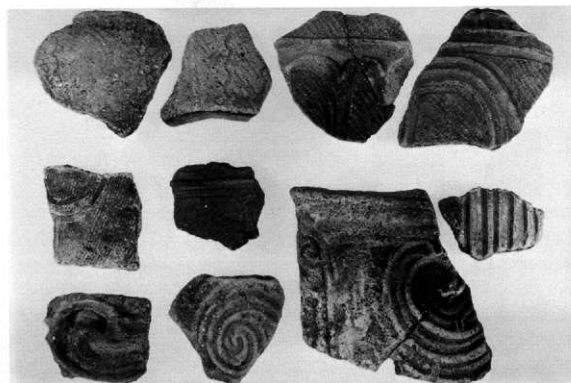
縄文土器 (第II群第2類土器)

縄文土器



繩文土器 (第Ⅱ群第3類・第4類土器)

下段第4類土器



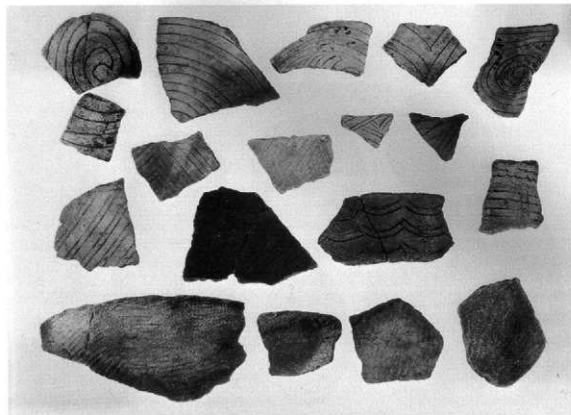
繩文土器 (第Ⅲ群・第Ⅳ群土器)

下段第Ⅳ群土器

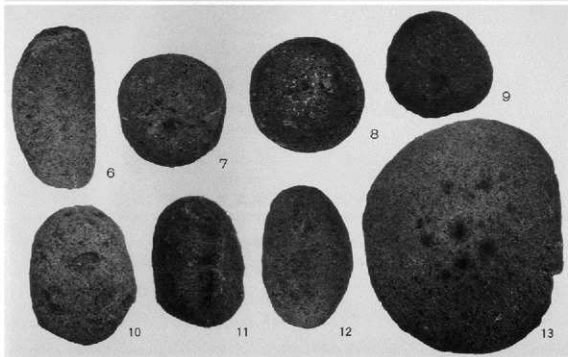
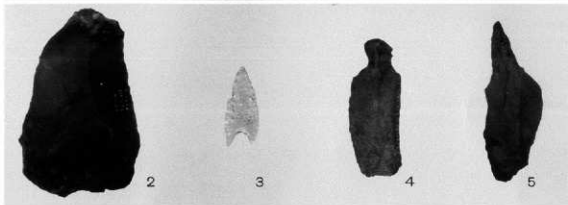
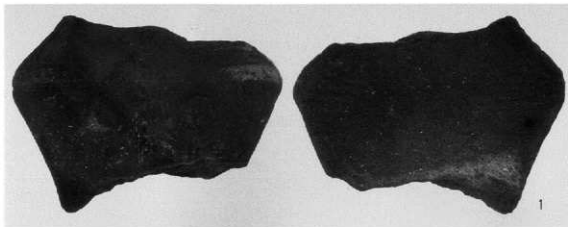


弥生式土器 (第V群第1類土器)

P1:16出土



弥生式土器 (第V群第1類・第2類・第5類土器)



土偶・石器・石製品

1…土偶 2~5…石器 6~13…石製品

福島県文化財調査報告書第87集
田島町寺前遺跡発掘調査概報

昭和55年3月31日発行

編集 茨城県文化センター(遺跡調査課)
福島市春日町5番54号 ☎34-2733

発行 福島県教育委員会
福島市杉妻町2番16号 ☎21-1111代

印刷 キング印刷株式会社
福島市太田町11番27号 ☎35-3358代
